

# 競技力別にみる徳島県競泳選手の現状について

## －高校生・中学生競泳選手の実態調査から－

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科・教科領域教育専攻

生活・健康系(保健体育)コース 篠原 健真

生活・健康系(保健体育)講座 松井 敦典

### I 緒言

日本の競泳は、2004年アテネオリンピックでの北島康介選手の平泳ぎ2冠を中心に、近年目覚ましい活躍を見せている。その背景には、計画的な競技力向上事業があり、ジュニア選手の育成は「競技力向上の基礎となるもの」とし、特に力を入れている。

2006年、のじぎく兵庫国体において、徳島県選手団は天皇杯得点でまさかの47位に終わり、県スポーツ界は氷河期に入ったとも言われている。県の水泳事情は、競技者登録数が年々減少傾向にある。柴田亜衣選手の活躍を始め、1992年、バルセロナオリンピックから4大会連続でオリンピック選手を輩出してはいるものの、後進が育っていない現状がある。

県スポーツ界低迷の原因として、高校の選手確保が困難になったことや、有望中学生の県外流出、部活指導への配慮不足などが挙げられ、更なる強化体制の見直しが必要とされている。

競技力向上のためには「人的資源・物的資源・用務的資源・情報資源」の4つが必要で、その4つの資源を用いて選手という「資本」で運営する。

本研究では、その「資本」にあたる選手の情報について調査することとし、徳島県中学生・高校生競泳選手の実態を知ることが目的とする。

### II 方法

#### (1) 調査対象

- ① 2005年度、第45回徳島県高等学校体育大会水泳競技出場者81人
- ② 同年、第45回全国中学生選抜水泳競技大会徳島県予選会出場者115人

#### (2) 調査期間・場所

調査対象①は6月5日(日)蔵本公園プールで、調査対象②は7月23(土)・24日(日)蔵本公園プールの期間・場所でそれぞれ行った。

#### (3) 調査方法

調査対象①は大会終了後、質問紙を配布し、その場で回収した。調査対象②は大会初日に各

中学校水泳部顧問に質問紙を配布し、大会期間中、大会本部席横に回収箱を設置した。

#### (4) 調査内容

調査内容は以下のとおりである。

- ① 学年・性別などについて
- ② 水泳歴について
- ③ 水泳に対するモチベーションについて
- ④ 練習状況について
- ⑤ 自分をとりまく環境について
- ⑥ 水泳の競技特性について
- ⑦ 種目・成績について

#### (5) 分析方法

得られたデータはコンピューターに入力し、Stat View Ver. 5.0(SAS社製)を用い統計学的に検討した。

### III 結果と考察

#### (1) 全体集計結果

質問紙調査における有効回答総数は、高校生が81人中71人の88.9%。中学生が115人中89人の77.4%であった。度数分布を用い、基礎統計量を算出したところ、以下のことがわかった。

- スイミングスクールの利用率が高く、全体の94.3%にあたる150人がスイミングスクールの経験がある。さらに61.3%の92人が現在もスイミングスクールに通っている。
- 大会に初めて出た年は学校区分が変わる「小1」「中1」「高1」と、小学校体育連盟主催の水泳検定会に出場できる「小5」「小6」が多い。
- 全体の93.5%の143人の選手は目標を自分で決めている。さらに全体の73.1%の117人の選手は「何秒で泳ぎたい」「特定の大会に出たい」という、具体的な目標を持っている。
- 全体の51.6%の81人の選手がやめようと思ったことがある。
- 卒業後競泳を続けると答えた選手は20.6%の33人。生涯スポーツで水泳を続けると答えた選手は39.0%の62人。と、肯定的な回答は少ない。

- 練習場までの交通手段は「自転車」が 45.1% の 69 人。「車」が 39.2% の 60 人であった。
- 水泳は「個人スポーツ」という回答が 57.6% の 87 人であるのに対し、「チームスポーツ」という回答が 76.9% の 120 人と「個人」よりも「チーム」という意識が強い。
- 「自由形短距離」が 62.6% の 87 人であるのに対し、「バタフライ」や「個人メドレー」はそれぞれ、2.2% の 3 人、4.3% の 6 人と種目に偏りがある。

(2) 競技レベルからみた結果

全体集計から得られた、日本水泳連盟水泳資格級をもとに、競技レベルを分類した。分類基準は次のとおりである。

「A 群」：資格級 9 級以上の選手

「B 群」：資格級 5～8 級の選手

「C 群」：資格級 1～4 級の選手

「D 群」：資格級に該当しない選手

- その競技レベル A・B・C・D 各群別に回答の傾向の違いを検討した。各群の人数は次のとおりである。「A 群」22 人。「B 群」57 人。「C 群」30 人。「D 群」32 人。と「B 群」の選手が多い。分割表分析の結果から以下のことがわかった。
- 図 1 に示すとおり、高校生には競技レベルが高い選手が多く、中学生には競技レベルの低い選手が多い。

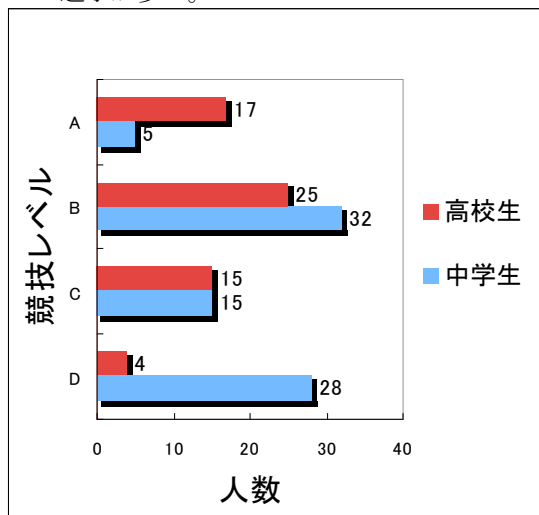


図 1：競技レベル別にみた中高生人数比較

- 小学校就学前までに水泳を始めた選手の割合は「A 群」が 91.0%。「B 群」が 80.6%。「C 群」が 56.7%。「D 群」が 45.2%と、競技レベルが高くなるにつれて割合も高くなっている。
- 競技レベルの高い「A・B 群」の選手は、スイミ

ングスクールでの練習実施率が 8 割を越え、現在もスイミングスクールに通っている。

- 競技レベルの高い「A 群」の 93.8% の選手は、小学校時代の成績も「上位群」に該当する。
- 水泳をしている目的は競技レベルの高い「A・B 群」の選手が競技的志向であり、低い「C・D 群」の選手が生涯スポーツ的志向である。
- 競技レベルの高い「A・B 群」の選手はスイミングスクールでの練習実施率が高く、競技レベルの低い「C・D 群」の選手は学校での練習実施率が高い。
- 「バタフライ」や「個人メドレー」は競技レベルの高い「A・B 群」の選手のみで構成され、競技レベルの低い「C・D 群」の選手は「自由形短距離」の選手が多く、偏っている。

IV まとめ

本研究では、競技力向上の基礎となるジュニア選手の実態を知ることが目的とした。

本研究で得られた結果をまとめると、高校生になると競技レベルの高い選手しか残っていない現状がある。競技レベルの階層は国際的競技者を頂点にピラミッド型の分布を示すとされている。しかし、徳島県の高校生にはその底辺となる選手がいない。競技力向上のための一つの対策として、ピラミッドを支える底辺の拡大が挙げられる。底辺となる選手が少ないのは、徳島県が他県に比べて高校プール設置率、高校での水泳授業の実施率、中学・高校での水泳指導の実施率の低さが背景として考えられる。底辺拡大のためには「学校の水泳授業の充実」も一つの解決策として、必要だと考えられる。また、競技力向上のためには「専門的な指導と練習会、合同練習や合宿、県外遠征」などの外部からの「刺激」が必要である。競技人口が減少傾向にある徳島県水泳界には、その「刺激」が足りない。競技人口が増えるだけでも「刺激」が生まれる。まずは、選手数の確保を目標に、スイミングスクールと教育機関が連携を図る必要がある。

V 今後の課題

今後の課題としては、このような調査を県水泳連盟の年間行事の一つとして定期的に行い、実態調査から情報を得ていくことである。また、そのデータを統計的に分析し、選手の実態を様々な側面からみる必要がある。さらには、水泳界の課題だけでなく、県スポーツ界が抱える課題も視野に入れての調査を行うことが必要であると考えられる。まずは、「対象の情報を知ること」から始めることである。